

大学経営政策研究

第12号 (2022年3月発行) : 85-101

進学大学決定に至る選択プロセスに関する研究

—MARCHへの進学を題材に—

水 野 雄 介

進学大学決定に至る選択プロセスに関する研究

—MARCHへの進学を題材に—

水野雄介*

A Study on Selection Processes in Choosing a University: Based on the Case of MARCH Universities

Yusuke MIZUNO

Abstract

This study focuses on MARCH Universities (Meiji University, Aoyama Gakuin University, Rikkyo University, Chuo University, and Hosei University), which have the same level of difficulty in admission, and elucidates the process by which students choose a university.

This study uses data from an interview survey conducted with students at Meiji University and analyzes the process by which students decide which university to enter by categorizing the process into three stages: (1) choosing the universities to apply to, (2) comparing the ranking of aspirations, and (3) deciding the university to enter.

The results of the data analysis can be summarized as follows. In stage (1), choosing the universities to apply to, the students narrowed down their choices by focusing on the “difficulty in admission,” the “academic field,” and the “impression and school culture.” In stage (2), comparing the ranking of aspirations, in addition to the influence of the “difficulty in admission” and “impression and school culture,” the influence of “educational content,” “location,” and “school facilities” became relatively stronger. In stage (3), deciding the university to enter, while “impression and school culture” had a strong influence, factors such as “student life” and “employment” influenced students’ choice.

These findings indicate that the factors that influence students’ selection differ in each process, and as the process progresses, factors with practical value gain more significance.

1. 問題関心と課題設定

優秀な入学者の獲得は、大学が存続・発展していくうえで重要な事項である。18歳人口が減少し

* 東京大学大学院教育学研究科 博士課程

ていくなか、学生獲得のための大学間の競争は激化していくと考えられ、各大学においては、競争環境の中で自大学が望むような学生を獲得しつづけるための施策を講じていくことが必要となる。一方で、その施策を検討していくためには、まず、受験生がどのような選択・比較の過程を経て、進学大学の決定に至っているのか、そして大学はそこにどのように関与しうるのかについて、理解しておく必要がある。そこで、本稿では、受験生が進学大学決定に至るまでの過程、すなわち、複数大学の中で、どのように受験大学を選択し、志望順位を比較し、進学大学を決定しているのかを明らかにする。それをもって、大学が学生獲得のための方策を検討していく上で、必要となる知見を得る。

なお、日本の大学は入学難易度の指標となる偏差値によって序列化されており、各大学にとっては、まず、同程度の偏差値の大学群における競争で優位に立つことが重要となる。そのため、本稿では、同偏差値帯の複数大学の中での受験生による選択プロセスに着目し、同偏差値帯という特徴から、明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学の5大学（以下、本稿では、これらの大学の総称として「MARCH」という語を用いる。）を分析対象とする。朝日新聞出版『大学ランキング2020年版』掲載の入試難易度ランキング¹に基づけば、これらの大学の文系学部（2019年度開設学部を除く）の偏差値平均値は、明治大学が60.4、青山学院大学が59.4、立教大学が60.3、中央大学が58.0、法政大学が57.0である。また、これらの大学は、東京都及びその隣県にキャンパスを有し、地理的な条件の共通性も高い。これらのことから、MARCHの5大学は、入学難易度・地理的条件の双方の面で、近しい受験者層を抱えていると考えられる。よって、MARCHを対象とすることで、同偏差値帯の競合校となる大学群の中での受験生による選択プロセスを明らかにすることができる。加えて、偏差値の序列に関し、MARCHは上位の大学群と下位の大学群に挟まれており、受験生の志望度は多様であることが想定される。これは、第一志望の受験生ばかりを期待することのできない私立大学の学生募集を検討する上で重要な要素となる。また、2019年度入学試験（一般入学試験）ではMARCHのみで約45万人の志願者がおり、私立大学志願者（一般入学試験）の11%以上を占める²。偏差値が上位・下位の大学群との併願を想定すれば、ボリューム層ともいえるこの大学群への進学行動を検討することは、偏差値上位から中位の私立大学を目指す受験生の進学行動を理解するうえでも重要である。

以上により、本稿では、MARCHの5大学を対象として、受験生がそれらの大学の中で、どのように受験大学を選択し、志望順位を比較し、進学大学を決定しているかを明らかにする。それを通じ、大学が学生獲得のための方策を検討する上で、必要となる知見を得る。

2. 先行研究と分析方法

(1) 先行研究

大学への進学に関し、高校生や受験生の進学行動を扱った先行研究は数多く存在しているが、その中でも、大学一般への進学を扱った研究と個別大学への進学を扱った研究の意味は異なる。本稿では、受験生がMARCHという個別大学への進学を決定するまでの過程を明らかにすることを目的としているため、特に後者の研究群を中心に先行研究を整理する。

まず、個別大学への進学を念頭に、大学の進学動機等に着眼した研究がある。『リクルートカレッジマネジメント第201号』の「進学センサス2016」は、高校生の志望校選択時の重視項目として、「学びたい学部・学科・コースがあること」、「校風や雰囲気が良いこと」、「就職に有利であること」が上位3項目であるとし、重視される項目が性別、大都市圏在住かどうか、文系か理系かによって異なるとしている。特定大学への進学動機を取り扱った研究では、広島大学を事例とした高地(2009)、T大学を事例とした北澤他(2012)、琉球大学の志望理由に言及した黒田他(2009)、P大学を事例とした福島他(2016)等がある。事例研究のため、統一的な知見ではないが、概ね、学問分野や教育内容・環境、経済的要因、学力や入試関連の要因が、その大学の受験を決めるうえで重要な要因であると示唆される。また、高地(2009)は、入試方法、学部、受験決定時期、志望順位、性別によって、受験生による広島大学の志望動機が異なるとし、北澤他(2012)は、既卒・卒業見込み、性別、出身地等により、受験生によるT大学の志望動機の様相が異なると指摘している。福島他(2016)は、P大学への出願を検討した受験生が他にどのような大学を検討し、出願したか、P大学や競合校に対してどのような志望動機を持っていたかを分析している。これらの研究は、各大学が受験大学として選択された理由を明らかにしているが、受験生がその選択に至るまでに、複数大学の中でどのような選択・比較を行っているかを明らかにしたものではない。一方で、立命館大学と競合A大学の間で、志望動機や入学決定要因を比較した西浦他(2015)は、受験校選択、志望度決定、入学決定の各段階での影響要因を分けて検討している点で、興味深い。しかし、受験校選択・志望度決定の2つの段階での影響要因については、「イメージ」、「偏差値」、「具体的内容」という大きな区分の限られた要因からしか論じられておらず、また、各段階での影響要因は同一の基準で分析されていない。ゆえに、各段階での受験生の選択・比較とその要因を詳細には明らかにできておらず、また、段階を経ることによるそれらの変化については、より適切な方法で検討する必要があると考えられる。

受験生が進学大学決定に至るまでの過程では、大学による受験生への関与も想定される。その手段としてイメージしやすいのが、入試広報である。大学の入試広報に関する研究は、その効果検証に関心を置いたものが多く、国立大学の事例研究を中心に蓄積がある。例えば、平尾他(2011)、森川他(2017)は、入試広報に接触した者の志望度や出願状況から入試広報の有用性を論じているが、因果関係の特定に限界がある。三好他(2019)は、四つの国立大学のオープンキャンパスの効果を検証・比較し、その中で、オープンキャンパスは、その大学を第一志望とする参加者の志望をより強固にする効果を持つこと等を指摘する。加えて、事例校の中でも大分大学を対象とした分析からは、学部関連情報が参加者の志望度を高めていることを論じているが、この研究を除く他の研究では、入試広報のどのような内容や側面が受験生の志望度や出願に影響を与えているかについて、十分に検討されていない。

以上の先行研究では、本来、受験生が直面しているであろう、複数大学の中での選択・比較の過程で、大学の選択や比較がどのように行われ、そこにどのような要因が影響を与えているかという点への理解が不足している。なお、これらの研究群に加え、入試制度の設計が志願者の量と質に与える影響(倉元他 2011、西郡 2015、神戸 2016)、立地が志願者数に与える影響(大谷他 2013、

船橋 2014)、学部間の競合関係が認知や志願決定時期に与える影響(藤井 2017)等が指摘されている。入試制度や大学の特性も受験生の選択や比較に影響を与えることが想定され、入試広報に限らず、より大きなレベルでの大学の経営行動への着目も必要となる。

(2) 分析方法

本稿の分析枠組みは、図1の通りである。西浦他(2015)を参考に、受験生が進学大学決定に至るまでの過程を「①受験大学の選択」、「②志望順位の比較」、「③進学大学の決定」の3つに分類し、各過程での選択・比較とその要因、また、過程間でのそれらの変化を明らかにする。このように、各過程における選択・比較を明らかにすることは、それぞれの過程での大学による受験生への関与を考える上でも重要である。分析にあたっては、筆者が明治大学の在大学生を対象として実施したインタビュー調査のデータを用いる。なお、MARCHの中で明治大学の在大学生のみを対象とした点は本稿の課題でもあるが、分析の精緻化のため、対象を限定した。MARCHという総称であっても、大学の特性や進学者の志向性は大学によって異なる。本稿では、過程間での受験生の選択・比較の変化にも着目しており、複数大学の在大学生を対象にすると、この変化が過程を経ることで生じたものなのか、各大学の特性や進学者の志向の差異により生じたものなのか、理解が困難になる恐れがある。そこで、本稿では、調査対象を限定し、過程間での選択・比較の変化に関する分析精度を高めることを優先した。

調査対象者は表1に示す13名である。先行研究において、文系・理系や入試形態による進学動機の違いが確認されていることを考慮し、文系学部の在大学生で、一般入学試験等³による入学者を対象とした。対象者は、当該大学の教職員から紹介を受けた後、筆者より調査を依頼し、協力の了承を得た。女子学生がやや少ないが、当該大学の女子学生比率(2019年5月時点35.2%⁴)を考えれば、著しい偏りではない。出身に関しては、Cのみが首都圏外出身である。その他、表1には各人のMARCH志望度、MARCH受験状況、第一志望校を示した。

調査は、2019年4月から8月に、1名あたり40分から90分程度の半構造化インタビューにより実施した。調査では、対象者に受験生だった頃を振り返ってもらい、進学大学決定に至るまでの3つの過程において、どのように大学の選択・比較を行い、明治大学への進学に至ったかを聞いている。

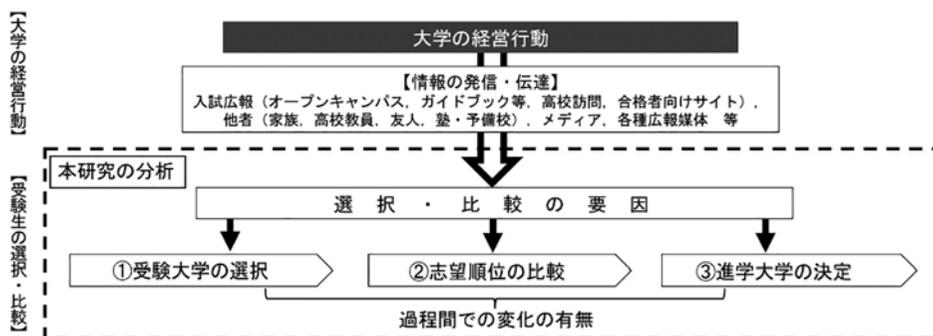


図1 分析の枠組み

表1 インタビュー対象者一覧

対象者	学部 学年 (調査時)	性別	出身	受験大学 (学部) 総数	MARCH 志望度 *1	MARCH 受験状況 *2	全受験大学での 第一志望校
A	政治経済学部 4年	男性	首都圏	9	高	①明治 政治経済 ②明治 経営 ③青山 経営 ④青山 経済 ⑤中央 商 ⑥法政 経営	明治大学
B	文学部 4年	男性	首都圏	10	高	①立教 文 ②明治 文 ③青山 文	早稲田大学
C	国際日本学部 2年	女性	首都圏外	8	高	①明治 情報コミュニケーション ②明治 国際日本 ③立教 文 ④立教 観光 ⑤法政 法 ⑥明治 文	早稲田大学
D	国際日本学部 4年	女性	首都圏	4	高	①明治 国際日本 ②青山 国際政治経済 ③法政 国際文化	明治大学
E	国際日本学部 4年	男性	首都圏	6	高	①明治 国際日本 ②明治 政治経済 ③明治 情報コミュニ ケーション ④法政 国際文化 ⑤法政 経済	明治大学
F	国際日本学部 4年	女性	首都圏	12	中	①立教 異文化コミュニケーション ②明治 国際日本 ③青山 国際政治経済 ④明治 商 ⑤法政 国際文化	早稲田大学
G	政治経済学部 3年	男性	首都圏	10	中	①明治 政治経済 ②立教 法 ③法政 法	慶應義塾大学
H	文学部 4年	男性	首都圏	10	中	①明治 文 ①明治 国際日本 ①明治 情報コミュニ ケーション ①立教 文 ⑤法政 文 ⑤法政 国際文化	早稲田大学 上智大学
I	商学部 2年	男性	首都圏	6	中	①明治 商 ②明治 経営 ③法政 経営	早稲田大学
J	政治経済学部 4年	男性	首都圏	10	中	①明治 政治経済 ②明治 法 ③立教 法	慶應義塾大学
K	商学部 2年	男性	首都圏	5	低	①明治 商 ②立教 経営	京都大学
L	政治経済学部 3年	男性	首都圏	6	低	①明治 政治経済 ②立教 法	一橋大学
M	国際日本学部 4年	女性	首都圏	6	低	①明治 国際日本 ①青山 文	東京外国語大学

*1 MARCH志望度については、各人の総受験大学(学部)のうち、MARCHの志望順位が3分の1以上であった者を「高」、3分の1未満、3分の2以上を「中」、3分の2未満を「低」と定義している。

*2 数字はMARCHの中での志望順位を表す。数字が同じものは受験時点での志望順位が同位だったもの。数字が○で囲まれたものは実際の合格大学(学部)。

調査に先立ち、対象者には、調査中の回答拒否の自由があること、回答内容により不利益を被ることはないこと、取得されたデータは匿名化して使用することを説明し、データの利用に関する了承を得た。調査内容は、許可を得て録音し、テープ起こしにより、分析用の文字データとした。分析にあたっては、各対象者について、このデータの中から、本稿の分析枠組みとする3つの過程での選択・比較に関わる言及部分を取り出し、どの過程に該当するものか分類したうえで、言及内容から、その対象者の選択・比較に影響を与えた要因を区分し、ラベルを付した。各要因は、内容に応じ、さらに上位の大分類にまとめた。この作業により、各過程での受験生の選択・比較に対する影響要因を整理した。

分析結果は第3節で論じるが、結果の理解のしやすさを優先し、大学名は伏せずに結果を示す。なお、特定の大学を称賛・非難する意図はなく、分析結果は、対象者個々人の認識・意見に基づいていることをあらかじめ述べておく。

3. 進学大学決定に至る選択プロセス

(1) 受験大学の選択

分析の枠組みに基づき、まず「①受験大学の選択」の過程について論じる。この過程は、受験する大学を決定する過程であり、受験生が同偏差値帯の大学において、どのように受験大学を選択しているのかを明らかにする。分析結果は、表2のとおりである。表2では、MARCH志望度別に

表2 「①受験大学の選択」への影響要因

大分類	要因ラベル	MARCH志望度別言及者			言及者数 (13名中)	言及例
		高	中	低		
入学試験	偏差値	A B C D E	F G H I J	K L M	13名	(受験大学は、偏差値と学問分野で選んだのですか。) E：そうですね。自分の志望するような学部系統と、自分の偏差値的なところを見て、一番ふさわしいところと言うと、なんですけど、行けるところで選びました。
	受験戦略	A C E	F G I J	L M	9名	(青山学院大学を受験しなかったのは、なぜですか。) G：青学に関しては、問題がもう合わないと思いました。(中略)問題として好きじゃないなって思って、受けなかったっていうのはありましたね。
学問・教育	学問分野	A B C D E	F G H I J	K L M	13名	(受験する大学は、どういう基準で選びましたか。) J：まず、政治が勉強したかったので、まあそれで政治学科の法学部だったり、政治経済学部だったりのところで。
	教育内容	C	I		2名	I：(明治大学を受験したきっかけとして)ゼミが少人数っていうのが大学らしいっていうか、それがいいなって思った。それが結構大きかったですね。そうだと明治の商が2年からっていうのは前情報で知っていて、ゼミに2人入れるっていうのも知ってて、ああ、ゼミっていうのは結構大きかったですね。
イメージ	認知	E	F I	L M	5名	(明治大学と法政大学以外で、MARCHを受験しなかったのは、なぜですか。) I：立教と明治で迷ったんですよ、どっちにしようかと思って。(中略)立教はオープンキャンパスも行っていないんですよ、何も行っていないんですよ立教は。で、まあ、ちょっと情報がなかったんですよ。まあ明治だとオープンキャンパスも行って、一応なんとなく分かっていたので、じゃあ明治かなって。
	印象・校風	A C D E	F G H I J	K M	11名	C：××県出身っていうこともあって、東京にそこを持っていまして、自分の中でもとりあえず大学は東京の中で決めたいっていうのがありまして、(中略)私全然知識がなくてそれで、進路を考えると東京にある大学で知ってる大学が、東大と早慶上智と青学と明治しかなかったんですよ。それで自分が知っている大学は有名なんじゃないかなっていうブランドとか知名度とかみたいところで決めたのが一番大きいところです。
学生生活	通学時間	B E	G H I J	K L	8名	(中央大学や法政大学を受験しなかったのは、なぜですか。) J：中央大学や法政大学は遠いんですよね。キャンパスが2時間以上かかっちゃうんで。通うのが難しいっていう。
	立地地域	C	F	M	3名	(オープンキャンパスに参加して、受験を決めた大学はありますか。) F：立教のキャンパスと講堂はいいなと思って。青学は、立地はいいなと思って。周りにもお店とかいろいろあって、学生として楽しめる場所にあるんだなというのはありましたね。明治は、中野の方には来ていないんですけど、図書館がすごい大きいっていうのは思いましたね。(中略)大きな図書館で勉強したりとかするのは憧れがありました。
	校舎設備		F	M	2名	

各要因への言及者を整理し、要因の代表的な言及例を記載した。なお、分析時には、調査対象者がMARCHのいずれかの大学(学部)を受験大学として選択するにあたり、影響を受けた要因を抽出した。言及内容は、「受験する」という判断に作用したプラスの要因と「受験しない」という判断に作用したマイナスの要因の双方が見られた。

受験大学の選択に影響した要因として、「偏差値」、「学問分野」に全員が言及しており、当然ながら、これらの要因を通じた大きな絞り込みが行われていることが分かる。「偏差値」については、表中Eの言及例に見られるような適度な偏差値帯であることが重要であり、偏差値が「高いこと」または「低いこと」を理由として、6名(A、B、E、H、J、K)が受験大学からMARCHを除外している。同偏差値帯の大学とはいえ、その中での偏差値の高低も受験生の選択に影響を与えている。この2つの要因に続いて言及が多かった要因が「印象・校風」である。この要因については、Cの言及例のようなブランドイメージを肯定的に評価する発言、「何となくよかった」という抽象

的な好印象としての言及の他、校風とも呼べるような特定の大学への固定観念的イメージをマイナスに捉え、受験大学から除外する言及が7名（A、C、D、E、H、I、K）に見られた。例えば、Eは、青山学院大学の校風に関し、以下の通り言及している。調査対象者だけでもこの校風に基づく作用が半数以上から言及されており、大学の固定観念的イメージの重要性も窺える。

E：「（青山学院大学を受験しなかった理由として）青学が一番そういう意味では、キラキラしているじゃないですか。キラキラ感もあって、合わないし、嫌だなんて思っています。」

「受験戦略」についても一定数の言及があった。言及内容は、表2のGの言及例に見られた「入試問題が合う・合わない」（A、G、I）、「有利な配点・条件で受験できる」（A、C、E、F）、「試験日程等で併願に都合が良い・悪い」（I、J、L、M）といった内容にまとめられる。「受験戦略」の要因の中でも、MARCHの志望度が高い受験生ほど「入試問題との相性」や「有利な配点・条件」のような、合格可能性に関わる内容から影響を受けやすく、志望度が低い受験生ほど、試験日程をはじめとする「他大学との併願のしやすさ」に影響を受けやすいことが見て取れる。例えば、MARCHの志望度が低かったMは次のように述べた。

M：「明治大学はもともと受けるつもりはなかったんですけど、受験の日程的に初めに上智が来るということだったので、先生にその前にウォーミングアップ的な感じで、MARCHもう一個受けておいたらって言われて受けました。」

「通学時間」についても8名の言及があり、受験大学の選択に関わる重要な要因であることが分かる。通学時間が短いことのプラスの影響も聞かれるが、8名全員が表2のJの言及のように、通学圏外と見なした大学を受験大学から除外している。「認知」については、5名の言及があった。「印象・校風」まで至らない、「知っているか、知らないか」といった単純な情報・接触の有無も受験大学の選択の上での影響要因だといえる。表2のIの言及からは、情報が不足していたことで、はっきりとした理由もないまま、立教大学が受験大学から除外されていく様子が見て取れる。また、志望度が低く、MARCHの受験をさほど重要視していなかったと思われる下記のMの言及もこの要因の作用をよく表している。なお、「印象・校風」の要因と比較すると、志望度が高い者の方が「印象・校風」の作用を言及しやすく、関心の高い大学群として、特定のイメージを持っていることが分かる。

（MARCHで受験しなかった大学は関心に上がらなかったということですか。）

M：「どちらかというとそっちの方が近いですね。そうかもしれないです。（中略）知っているところを受けちゃおうみたいな感じだったので。」

「教育内容」⁵、「立地地域」、「校舎設備」については、言及者は多くない。大学の魅力として、受験大学の選択に影響する要因ではあるが、この過程では、これらの詳細な内容を吟味するよりも、その前段階である「学問分野」や「通学時間」等により、大きく大学を絞り込む方が主であると分かる。

以上を整理すると、この過程での受験生の選択については、大きく受験大学を絞り込むことが中心であるといえる。その中では、当然ながら「偏差値」、「学問分野」による絞り込みがなされる他、上位の大学を目指すための「受験戦略」による合理的な選択もなされる。加えて、志向性に合わない大学を受験大学から除外するという判断も見られ、「印象・校風」、「通学時間」の要因も重要と

なる。なお、「受験戦略」、「認知」、「印象・校風」の要因については、要因の作用が志望度によって異なる傾向があり、志望度に応じた大学からの関与の方策を講じることの有効性も示唆される。大学にとってみれば、まずは、この絞り込みの中で、受験大学として残ることが重要であるといえるだろう。

(2) 志望順位の比較

続いて、「②志望順位の比較」の過程について論じる。この過程は、受験大学の中で志望順位を比較する過程であり、受験生が同偏差値帯の大学において、どのように大学を比較し、志望順位を決定しているかを、調査対象者によるMARCHの大学（学部）間での比較から明らかにする。分析にあたっては、調査対象者がMARCHの中で志望順位を比較するにあたり、いずれかの大学（学部）間での比較要因として言及したものを全てを抽出しており、必ずしも全ての大学（学部）について言及されたものではない。調査対象者のうち、MはMARCHの中での志望順位を決めていなかったため、分析から除き、残る12名を分析対象とした。分析結果は表3の通りである。表3では、表2と同様に、MARCH志望度別に各要因への言及者を整理し、要因の代表的な言及例を記載している。

「②志望順位の比較」の要因としては、「偏差値」、「印象・校風」の言及者が多い。これらは、「①受験大学の選択」に引き続き、重要性が高い要因であるといえる。「偏差値」の作用については、表3のAの言及例から理解しやすい。少しでも偏差値の高い大学に進学することが受験生にとっては重要であると改めて確認される。「印象・校風」は、言及者が最も多い要因である。「偏差値」が同程度であるからこそ、他の要因として、「印象・校風」が重要になるとも理解できる。言及内容は、「①受験大学の選択」と同様に、「ブランドイメージ」（A、E、K）、「抽象的な好印象」（B、F、J、L）、「校風」（A、C、D、K）の3つに分類できる。どのような形でも「印象・校風」がよいと認識されることの意義は大きいといえる。

「受験戦略」、「認知」については、「①受験大学の選択」では一定数の言及者がいたが、「②志望順位の比較」では言及者がいなかった。これらの要因は、受験大学を絞り込む上でのみ影響力を持つといえる。「通学時間」についても「①受験大学の選択」の過程から言及者が減っている（8名→2名）。「①受験大学の選択」の時点で、調査対象者は、「通学時間」を許容できない大学を除外しているため、「②志望順位の比較」での言及が減ったものと思われる。「通いやすさを考えると立教大学の志望順位が上になった」と語るBの発言のとおり、受験生にとっては「通学時間」が短いことも魅力の一つだが、本稿の調査結果からは、「①受験大学の選択」のため、大きく大学を絞り込む上での影響が大きいと理解された。「教育内容」、「立地地域」、「校舎設備」については、「①受験大学の選択」と比較して、言及者が増えている。「受験戦略」、「認知」、「通学時間」の影響力が「①受験大学の選択」と比較して弱まった一方で、これらの要因は相対的に影響力が強くなったと理解できる。「教育内容」に関し、表3のDの言及は、情報収集に積極的な受験生の発言と捉えられるが、「特定の授業に関心を持った」というC、「国際的な授業内容や留学プログラムをよいと思った」とするFについても具体的な教育内容に基づく比較に言及している。「①受験大学の選択」での「教育内容」への言及が、表2のIの言及例のようなカリキュラム等の制度面に留まっていたことを考

表3 「②志望順位の比較」への影響要因

大分類	要因ラベル	MARCH志望度別言及者			言及者数 (12名中)	言及例
		高	中	低		
入学試験	偏差値	A E	G H I		5名	(MARCHの中で明治大学の志望順位が高かったのは、なぜですか。) A:偏差値とかになってしまふ部分が強いと思います。偏差値とネームバリューってところが強いのかになって気がします。(中略) 明治と青山も明治の方が、偏差値が高いと思ってて多分、第一志望にしたんだと思います。そうですね、全体的に見るとどうしても偏差値とかで決めている部分が多いのかになって思います。
	受験戦略				0名	
学問・教育	学問分野	A D E	F		4名	(一番惹かれたのは立教大学だったのですか。) F:立教に、はい、惹かれましたね。(中略) あと、コミュニケーションという点に重きを置いているというのが面白いと思いますね。 (国際政治経済学部よりも異文化コミュニケーション学部の方が分野として関心があったということですか) F:と思います。多分政治経済を学べるのもいいなと思っていましたけど、それよりも多分コミュニケーションの方が自分にとっては上に来ていたと思います。
	教育内容	C D	F		3名	D:明治の国際日本学部のシラパスを見たときに英語で日本のことを学べる授業が多くて、日本の歴史とかもあつたり、日本と海外の比較とか、そういうのもあつて、そのシラパスも読んで明治の国際日本学部が一番自分の好きなことに合うかなと思って、結局受かったので、明治のそこになりました。
イメージ	認知				0名	
	印象・校風	A B C D E	F J	K L	9名	(明治大学と立教大学の志望順位はどのように決めましたか。) C:どっちかっていうと明治の校風の方が好きだったし、本当にちょっと繰り返になっちゃうかもしれないんですけど、校風というか想像というか、イメージが強かったです。イメージのなんというんだろうな、バンカラっていう言い方は変ですけど、おしゃれな大学よりもそっちの方がよかったなみたい。(中略) 明治とか早稲田の方が、内部生はいるだろうけど自分も入れそう(なじめそう)というか。
学生生活	通学時間	B	G		2名	省略
	立地地域	A B C		K	4名	(明治大学の志望順位が高かったのはなぜですか。) K:キャンパスは、今は和泉なんですけど、3・4年になると駿河台になったりとかして、駿河台とかだと自分は古本屋に行ったりするのとかも好きなので、近くに色々好きな場所があるという場所の面も結構重視したかなっていうのはありますね。
	校舎設備	A B	F		3名	(キャンパスの比較が志望順位に影響した部分はありますか。) F:多少ありますね。立教大学は、すごいジブリみたいな感じのキャンパスと学食と講堂が綺麗だなって思ったりしましたし、それでなんかここに通えたらいいなと思ってたりというのはありましたね。
経済的メリット	学費	A			1名	省略
	就職	A E			2名	(明治大学の方が法政大学よりも就職がよいだろうという認識は?) E:自分の中ではですけど、かなりありました。その当時聞いていた明治大学が一番強いという情報が一つと、あとはMARCHが最低ラインというところがあったので。

えれば、「②志望順位の比較」では、言及の具体性が高まっていると理解できる。「学問分野」は、言及者数自体は減っているが、その言及内容は同様により具体的になっている。例えば、Fは、「①受験大学の選択」にあたっては、「国際系の学部に行きたいとは思っていました。なのでそれぞれの学部も国際色豊かなところを受けていました。」と述べ、分野としての大きな括りを示すまでだっ

たが、「②志望順位の比較」では、表3の言及例のとおり、「国際系の学部」の中でも「コミュニケーションという点に重きを置いている」という詳細な内容に言及し、立教大学の異文化コミュニケーション学部を志望上位としている。また、Aは、「①受験大学の選択」に際し、「法律とかお金のことに詳しくは将来困らないのかなって思って、法学部とか経済・経営系を受けていて（略）」と語ったが、「②志望順位の比較」に際しては、「政治と経済両方学べる」ことで明治大学の政治経済学部を第一志望にしたと述べた。「立地地域」についても同様の要因の変化が見られる。「①受験大学の選択」の過程で言及したCとMは、「東京の大学で決めたい」、「都会に行きたい」と大きな絞り込みの要因として「立地地域」に言及している一方、「②志望順位の比較」に際して言及したA、B、Kは、大学の「立地地域」が、学生生活に対して、具体的にどのようなメリット・デメリットを持つかという視点から話した。

A：「渋谷はちょっと、ごちゃごちゃしすぎかなって後になって思ってたんで、思いましたね。なんかニュースとかでハロウィンとかの映像見ると、このなかで大学通わなきゃいけないのかなとか、それ、自分はあるまいやだなって思って、そういうところも青学が下がっていたところだと思えます。」

「②志望順位の比較」では、これらの要因の変化に加えて、経済的メリットに関わる「学費」、「就職」の要因が新しく見られるようになった。「就職」の要因に関して、表3のEの言及からは、「①受験大学の選択」では、この要因が受験大学の絞り込みの中で「偏差値」に吸収されていたことも伺える。「①受験大学の選択」の時点では、一つのラインとして受験大学を絞り込み、その中で、明治大学の方が就職がよいという認識が志望度を高めている。

以上より、「②志望順位の比較」では、「①受験大学の選択」と比較すると、実際に進学する可能性をより現実的に捉えて、各要因を用いた比較がなされていると理解できる。大分類において、学問・教育や学生生活にあたる要因の多くが相対的に影響力を増しており、言及される内容の面でも、具体性が高まっている。加えて、経済的メリットに関わる要因への言及もなされていく。「①受験大学の選択」は、大きな絞り込みの過程と捉えることができたが、「②志望順位の比較」は、そのような大きな絞り込みを経て受験大学として選択された大学が実際の進学を現実的に想定した形で比較されていく過程だと理解できる。

(3) 進学大学の決定

最後に「③進学大学の決定」の過程について論じる。この過程は、入学試験後、合格した大学の中から実際に進学する大学を決定する過程であり、受験生がその過程で、同偏差値帯の大学をどのように比較し、進学大学を決定しているかを、調査対象者によるMARCHの大学（学部）間での比較から明らかにする。分析にあたっては、調査対象者がMARCHの中での比較にあたり、いずれかの大学（学部）間での比較の要因として言及したものを抽出している。分析結果は、表4の通りである。表4では、表2、表3と同様に、MARCH志望度別に各要因への言及者を整理し、要因の代表的な言及例を記載した。「③進学大学の決定」の過程は、「②志望順位の比較」の過程からみれば、ある種の「再検討」にあたり、その必要性が生じた者にのみ、この過程での再検討が確

表4 「③進学大学の決定」への影響要因

大分類	要因ラベル	MARCH志望度別言及者			言及者数 (4名中)	言及例
		高	中	低		
入学試験	偏差値				0名	
	受験戦略				0名	
学問・教育	学問分野	C			1名	C：私が受かった学部だと、明治の国日か立教の英米文学だけで比べることになっちゃうと思うんですけど、(中略)あとやりたいことっていう点で、国日の方が圧倒的にやりたかったんですよ。英米文学で文学をずっとしているのとか私できないんで、国日の方が幅広そうだったし、授業内容もおもしろそうだったんで、自分がやりたいことと。
	教育内容		H		1名	H：(明治大学の文学部と情報コミュニケーション学部で比較した際に)教職を取っている人が文学部の方が多かったんで、それだと多分、人よりもプラスでコマを取ることになるので、それが普通になる環境の方がいいのかなとは思ったので、教職を取っている人が多くいた方が自分自身もやりやすいだろうなというところで文学部にしたのかなとは思いますが。
イメージ	認知				0名	
	印象・校風	B C	H I		4名	I：法政と明治だったら、まあそこは親とも相談したんですよ、一回、まあ明治じゃないって。イメージも明治の方が上だし。(中略)お父さんが働いてるんで社会的なイメージで言うと明治の方が上だと言われて、そっかって。
学生生活	通学時間				0名	
	立地地域				0名	
	校舎設備		I		1名	本文中に記載
	学生生活	B	I		2名	B：(明治大学に進学した理由として、)高校の同級生が、結構自分の仲の良い2年間同じクラスだった友達だったりとか、実際に3年間同じ部活の友達とかが(明治大学に)いたりとか。(中略)浪人して通おうとなったときに、困った時にある意味頼れる存在というか、(友達は)1学年上になるので、例えば履修の組み方とかも、(中略)やっぱり一年上で先に行っている友達に聞いた方がいいのかなというのがあって。
経済的メリット	学費				0名	
	就職	C	I		2名	C：(進学大学を決める際、)明治のサイト見て、就職率がよかったっていうのと、学校の先生とかにも聞いて、(中略)高校の先生に泣きついてどうしようかって話に行ったときに就職は明治の方がいいんじゃないって言われて、丸々そのまま受け取って、結局、自分がやりたいことをすればいいんじゃないみたいなことを言われて、明治にしたんです。

認められた。調査対象者のうち、「③進学大学の決定」のために比較を行ったものは、B、C、H、Iの4名である。他の9名については、再検討の必要なく当初の志望順位のまま進学大学を決定したか、あるいはMARCHの中で1大学のみ合格していた。この傾向を見れば、「②志望順位の比較」で明確な志望順位が決定されると、その後、その志望順位の転換に大学が関与するのは、難しいと理解できる。

各要因について見ていくと、まず、「偏差値」には言及者がいなかった。しかし、「偏差値」が大学序列の指標になるものであることを考えれば、細かな「偏差値」の高低への言及者がいてもおかしくないはずである。この結果のみから、「③進学大学の決定」の過程において「偏差値」の影響が小さいと判断することには慎重になるべきだろう。「印象・校風」は、4名全員から言及された。これまでの2つの過程でも重要性が確認されており、進学大学の決定に至るまでの全ての過程で重要な要因であるといえる。表4のIの言及例のようなブランドイメージの作用の他、Hは、固定観

念的な明治大学の校風のイメージとの自己の親和性を語り、それを有意義な学生生活への期待へと結び付けている。

H：「(進学大学を決める上で) 本当に一番大きいのは、担任の先生とか、周りからの印象とかで、立教と明治のどっちにいそうって話で。(中略) そうなったときに明治で頑張っていけそうだよねって。早稲田落ちて、這い上がっていくじゃないですけど、よく言われるように、そういうので頑張れるんじゃないっていうのもあって、明治にしたっていうのはあると思いますね。(中略) 似たような人たちと一緒にいた方が楽しいのかなと思うので。(略)」

「学問分野」、「教育内容」には1名ずつ言及があった。進学大学を決定する過程であることもあり、表4のC、Hの発言のとおり、進学をより現実的に捉えた際のメリットに言及されている。「校舎設備」は、Iが「キャンパス変わるの割といいかなと思いましたね。」と言及した。Iは、この要因について、「②志望順位の比較」まではさほど意識しなかったが、「③進学大学の決定」の上で考えるようになったと述べており、過程により、影響要因が変化していくことが分かる。このような影響要因の変化は、「学生生活」に関する直接的な言及がこの過程になって初めて、2名からなされたことについても指摘できる。表4のBの言及例の他、Iは、「〇〇研究会(サークル名)に入っているんですけど、法政大学には(同分野のサークルが)たしかなかったので、そこは(明治大学への進学を)決めた要因に」と述べ、「③進学大学の決定」の過程になって、それまでは意識しなかった、「どちらの大学が楽しいか」を考えたと振り返った。「就職」についても2名の言及が確認されている。各要因への言及内容から、「③進学大学の決定」の過程では、「②志望順位の比較」の過程よりもさらに、進学を現実的に考えた際にメリットとなる要因が重視されているといえる。

次に、この過程での比較に関する理解を深めるため、B、Cの2名を事例として、その比較・検討過程を詳細に論じる。Bは、「③進学大学の決定」に際し、「②志望順位の比較」の過程から、志望順位が逆転したケースである。Bは、「①受験大学の選択」に際し、大きく大学を絞り込んだ後、「②志望順位の比較」では、「印象・校風」、「通学時間」、「立地地域」、「校舎設備」の要因に触れ、MARCH内での志望順位を、立教大学、明治大学、青山学院大学の順とした。立教大学について、抽象的な好印象の他、「通いやすさ」と「綺麗なキャンパスに惹かれた」ことを志望上位の理由として語った。入学試験を経て、MARCHでは3大学全てに合格したが、「③進学大学の決定」では、志望順位を逆転させ、MARCH内では当初第二志望だった、明治大学に進学を決めた。その背景として最も大きかったのは、表4にも言及を記載した「学生生活」の要因である。浪人の経験といった本人が置かれていた状況も影響しているが、友人と学生生活を送れることが、Bにとって、現実的なメリットが大きかったのだと理解できる。これをきっかけに明治大学のブランドイメージも再考したようである。

Cは、「③進学大学の決定」に際し、当初の志望順位を維持したケースである。「②志望順位の比較」で、明治大学と立教大学を比較する上では、「すごい興味のある授業があって、それを受けたい」や「校風が好き」という理由で明治大学を上位としていた。入学試験の後、立教大学の文学部に合格し、入学金を納めたが、その後に明治大学の国際日本学部を追加合格となり、「③進学大学の決定」のための再検討が必要になった。表4に記載の通り、「学問分野」は、明治大学の合格学部の

方が関心があり、ブランドイメージも明治大学の方が上だと考えていたが、入学金を支払ってしまっていたこともあり、高校の教員に助言を求めた。その中で、これも表4に記載の通り、明治大学の方が「就職」はよいのではないかという話を受け、それも後押しになって、明治大学への進学を決定している。なお、この「就職」の要因は、それまでの2つの過程では、「そんなに考えてなくて」という程度で、進学大学を決定する段階になり、進学に伴うメリットとして認識されるようになったと考えられる。

以上より、「③進学大学の決定」での比較に際しては、「②志望順位の比較」よりもさらに、進学に伴う現実的な価値が重視されているといえる。この過程においては、「印象・校風」の影響が引き続き強く見られる一方、進学による現実的なメリットに結びつく「学生生活」や「就職」の要因が、進学大学を決定するうえでの後押しや志望順位の転換のきっかけになっている様子が確認された。大学の側からすれば、自大学に進学することの現実的なメリットを伝えていくことが、この過程での受験生への関与として重要であると考えられる。

4. 結論と考察

本稿では、受験生が進学大学決定に至るまでの過程を「①受験大学の選択」、「②志望順位の比較」、「③進学大学の決定」の3つに分けて分析を行った。受験生の選択・比較に影響を与える要因は、各過程で異なっており、過程を経るにつれ、進学に伴う現実的な価値を持った要因が重要性を増していくと理解できる。具体的には、「①受験大学の選択」では、「偏差値」や「学問分野」、「印象・校風」を中心とした大きな絞り込みが行われるが、「②志望順位の比較」では、「偏差値」や「印象・校風」が引き続き強い影響力を持つとともに、「学問分野」の検討内容がより具体的となり、加えて、「教育内容」、「立地地域」、「校舎設備」の影響が相対的に強くなることが確認された。また、「③進学大学の決定」では、引き続き「印象・校風」の影響が強く見られる一方で、調査対象者の中でこれまで強く意識されていなかった「学生生活」や「就職」といった要因がその選択に影響を与えている。先行研究では、大学間の競合関係を前提に、受験生の進学大学決定までの過程を検討したものが少ない。本稿は、事例大学を限定したうえではあるが、複数大学間での受験生による選択・比較の過程とその影響要因、それらの過程間での変化を分析し、受験生の進学大学決定までの過程をより現実に即した形で明らかにした。この点が本稿の意義・新規性である。

本稿の知見は、特定大学の学生を対象とした調査によるものであり、一般化に限界があることは十分に理解したうえで、本稿の問題関心の根源である、学生の獲得のために大学が取りうる方策について、示唆を述べる。本稿の知見に基づけば、大学が受験生による選択・比較の過程に関与していくためには、次の二点が重要であると考えられる。

第一に、進学大学決定に至る各過程での受験生に対する影響要因を踏まえ、経営行動を選択していくことである。本稿では、受験生への影響要因として、複数の過程で強い影響力が確認された要因と特定の過程でのみ影響力が確認された要因の双方が見られた。前者にあたる「印象・校風」は、学生の獲得に関し、全般的に重要性が高く、その形成・向上を目的とする広報戦略やブランディングの推進は、大学の側での重要な経営行動であるといえる。また、「印象・校風」が必ずしも、広

報戦略やブランディングのみから形成されるものではないことを踏まえれば、絶えず、教育内容・環境の改善を積み重ね、大学の魅力を高めていくことが必要である。一方で、「受験戦略」や「学生生活」の要因は、特定の過程において影響力を持つ要因である。これらの要因につながる経営行動については、各大学の置かれた状況に応じた選択が必要である。例えば、入試制度の設計を変えることは、「受験戦略」の要因を通じ、志願者の量や質を変化させることにつながりうるが、その施策の意義は、大学が抱える課題によって異なる。

第二に、時期とターゲットに応じた入試広報を行うことである。進学大学決定に至る過程において、受験生への影響要因が変化していくことを考えれば、入試広報の側では、適切なタイミングで、受験生の選択・比較に関与しうる情報を発信していく必要がある。必ずしも全ての受験生が同一の時期に、同一の選択・比較の過程にあるとは限らないが、ターゲットを明確化することで施策を講じることは可能であろう。例えば、合格者向けウェブサイト等による広報を行っている大学もあるが、入学試験の合格者をターゲットとして、教育・学生生活の魅力、経済支援、就職実績等の進学に関する現実的なメリットを発信していくことは、「③進学大学の決定」の過程にある受験生への関与として有効な施策であると考えられる。

最後に本稿の課題を論じる。本稿では、MARCHの中でも明治大学の在学生のみを調査対象としたため、結果の解釈にあたっては、その前提をよく考慮する必要がある。ただし、分析結果の大枠自体は、事例大学に特有の結果と思われる部分は少なく、ある程度、一般化も可能であると考えられる。また、分析は、質的調査に基づいており、受験生の選択・比較の要因について、言及者数でその影響力の強弱を測ることについては限界がある。これらの点について、調査対象の拡大や量的調査による裏付けが必要であると考えられる。

注

- 1 同入試難易度ランキングは、河合塾主催の「全統模試」及び直近2年間の入試結果から作成されたもので(2019年2月時点)、偏差値は合格可能性50%となる下限値である。
- 2 朝日新聞出版(2020)掲載の2019年度入学試験におけるMARCH各大学の一般入試志願者数と文部科学省の「平成31年度国公立大学入学者選抜実施状況」https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_daigakuc02-000006206_1.pdf(2021年8月14日閲覧)に基づく。
- 3 調査対象者の受験当時の明治大学における入学試験区分で、一般入学試験・全学部統一入学試験・大学入試センター試験利用入学試験による入学者を対象とした。
- 4 学校法人明治大学『2019年度事業報告書』https://www.meiji.ac.jp/chousaka/copy_of_jigyohokoku2019.html(2021年7月17日閲覧)掲載の学生数より算出。
- 5 「学問分野」と「教育内容」のラベルに関しては、前者を各大学・学部が対象とする学問分野・領域に関する言及へのラベルとし、後者を各大学・学部における具体的な授業・カリキュラム・留学プログラム等に関する言及へのラベルとした。続く、「②志望順位の比較」、「③進学大学の決定」の過程でも同一の基準で分類している。

参考文献

朝日新聞出版 2020 『大学ランキング2021年版』

朝日新聞出版 2019 『大学ランキング2020年版』

藤井恒人 2017 「志望大学の認知、志願確定と情報収集時期、方法の関係—入学者アンケート分析より—」『大学入試研究ジャーナル』27: 103-108.

福島真司・小田和久・鈴木達哉 2016 「全国調査から見る受験生の進路動態の分析—テレメール全国一斉進学調査を利用した—地方大学の分析事例から—」『大学入試研究ジャーナル』26: 103-110.

船橋伸一 2014 「都心部へのキャンパス移転が志願者数に及ぼす影響について—大学は立地産業なのか—」『大学入試研究ジャーナル』24: 21-27.

平尾智隆・大竹奈津子・久保研二・山内一祥 2011 「ある国立大学における入試広報の効果測定—志望順位を決定する要因—」『大学評価・学位研究』12: 19-28.

神戸悟 2016 「意図した受験者層へのアプローチの試み—入試方式変更による実践事例報告—」『大学入試研究ジャーナル』26: 15-21.

北澤武・渡辺美紀・上野淳 2012 「一般入試選抜を対象とした入学志願者の傾向分析—過去3年間の入学志願者アンケート調査分析から—」『大学入試研究ジャーナル』22: 163-171.

高地秀明 2009 「高校生の大学選択と志望動機に関する考察—本学の入学者に関する調査から—」『大学入試研究ジャーナル』19: 83-88.

倉元直樹・大津起夫 2011 「追跡調査に基づく東北大学AO入試の評価」『大学入試研究ジャーナル』21: 39-48.

黒田登美雄・西本裕輝・岡崎威生 2009 「琉球大学入学者アンケート調査結果に基づく入試方法の検討—平成19年度入学者を対象とした検討—」『大学入試研究ジャーナル』19: 89-94.

三好登・望月聡・福井寿雄・西郡大・吉村宰・當山明華・藤井良宜 2019 「進学希望の変化に与えるオープンキャンパスの効果研究—九州地区国立4大学によるベンチマーキングを通じて—」『大学入試研究ジャーナル』29: 124-131.

森川修・山田貴光・古塚秀夫 2017 「オープンキャンパス参加者の入試動向—鳥取大学の事例—」『大学入試研究ジャーナル』27: 149-154.

西郡大 2015 「入試制度設計がもたらす志願者動向への影響—後期日程の制度設計を事例に—」『大学入試研究ジャーナル』25: 37-42.

西浦明倫・川口潔・宮下明大・熊谷秀之 2015 「志望度及び入学決定要因に基づく入試広報施策の展開」『大学行政研究』10: 33-49.

大谷奨・本多正尚・島田康行・白川友紀 2013 「大学移転が受験動向に与える影響—東京教育大学から筑波大学への「移転」を事例として—」『大学入試研究ジャーナル』23: 15-20.

リクルート進学総研 2016 『リクルートカレッジマネジメント』201: 4-27.

